

今週のメニュー

■トピックス

◇JPEC研修会を東京、大阪で開催

ー塩ビの最近の動向、リサイクル、中小企業とデザインについて紹介ー

塩化ビニル環境対策協議会 事務局

■随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(31)

木下 清隆

■トピックス

◇JPEC研修会を東京、大阪で開催

ー塩ビの最近の動向、リサイクル、中小企業とデザインについて紹介ー

塩化ビニル環境対策協議会 事務局

塩化ビニル環境対策協議会(JPEC)主催の研修会を、大阪は2月14日(水)阪急グランドビルで、東京は3月15日(木)六本木ミッドタウンでそれぞれ開催しました。JPECでは会員団体の会員の方々や塩ビの製品に関係されている皆様に、塩ビの最近の状況やリサイクルなどをテーマとして、外部の講師を招き講演会や研修会を開催しています。

大阪はここ数年では最多の約60名の参加があり、リサイクルへの強い関心が表れました。東京は年度末で参加人数は少なめだったものの、いずれの講演内容にも強い関心が示され、講演後には演者への質問が長く続く研修会となりました。

大阪では塩ビの最近の状況を塩ビ工業・環境協会より説明し、その後**タイボー(株)**の平野社長より「リサイクルを考える」をテーマに講演をいただきました。

モノを作るのが動脈産業で廃棄物を処理する側を静脈産業というサイクルを示したイメージの中で、平野社長はリサイクル業がモノを循環させる基幹部分としての心臓産業であるという考えを提唱されました。

会場からは実際リサイクルに取り組んでおられる

平野社長からの提言を重く受け止め広めていくべきとの意見がありました。



平野氏講演(大阪会場)



鈴木氏講演(東京会場)

東京ではまず**日本デザイン振興会**の鈴木紗栄様に「東京ビジネスデザインアワード」について説明をしていただきました。中小企業の技術とデザインとをつなぐコンテストを実際の取り組み例を交えて説明をいただきました。

来場者からはビジネスデザインアワードの応募件数や事務局としての苦労した点などの質問が出されました。

二つ目は [\(株\)ナカダイ](#) の中台常務に「捨てる」をデザインする」と題し講演を頂きました。廃棄物として捨てられたものをリユース、分けてパーツにしたものをマテリアルライブラリーやワークショップなどの展示やデザインを通して、新しい価値とモノの流れを生み出すリマーケティングビジネスを進めておられます。実際前橋の工場にある多くのマテリアルを見たいとの意見も多くありました。



中台氏講演（東京会場）

今後も J P E C 会員団体や塩ビを使っていただいている多くの方々に、塩ビ及び環境に関する情報を発信すると同時に皆様からのご意見を頂戴する情報交換の場として続けてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕（3 1）

木下 清隆

<前回とのつながり>

博多の櫛田神社の話に入る前に、博多の古代史を簡単に振り返ることにしたが、前回は「那津時代」の概略を述べたので、今回は、その後の「荒津時代」と「袖の湊時代」について述べることにする。

次の「荒津時代」は鴻臚館時代とも云える。大宰府が那津から十二 km も奥に引込んだために、使節の迎賓館として鴻臚館が建てられた。この鴻臚館と港湾警備のために博多警固所が併せて設置されたことから、今に警固の地名が残っている。鴻臚館の場所は古来多くの論議があったが、近年、嘗ての平和台球場跡ということで決着がついた。[博多古図](#)によれば、今の荒戸、大濠公園、草香江、更には鳥飼、別府辺りまでが草香江と名付けられた大きな入江となっている。この入江の入口にあたる現在の西公園は、当時は荒津山と云われていたらしい。従って、この荒津山の対岸に鴻臚館は設置されたことになる。分かり易くいうと西公園と平和台一帯は丘陵地になっていることから、その間に挟まれている現在の荒戸町辺りが海面で、そこが草香江の入り口になっていたことになる。



鴻臚館跡（鴻臚館跡展示館）



古代の博多湾と鴻臚館（鴻臚館跡展示館 展示図）

朝鮮半島、大陸からの多くの船は草香江に入ってきて、その入り口近くの鴻臚館前で停泊したことになる。このようなことから鴻臚館付近の停泊地を荒津といったらしい。現在の大濠公園はかつての草香江の名残なので、この濠は海に繋がっている。このような鴻臚館の出現によって、那津時代から見れば利用する湊が変化したことから、この時代を「荒津時代」と名付けたい。



渤海広場（中国吉林省敦化市）

この時代は、白村江で倭国を破ったことから、唐は朝鮮半島全体をその統治下に置くような政策を採り始めた。当然、新羅は反発する。ついに新羅は立って唐を相手に戦い、勝利する。結果的に旧高句麗・百済を支配下におくことになり、新羅によって初めて朝鮮半島は統一された。大国となった新羅の日本に対する態度は、従来とは当然異なってくる。朝貢関係を解消しようと図る新羅、あくまでも君臣関係を維持しようとする日本、このようにして日本・新羅関係は冷却期を迎えることにな

る。これまでとは異なった厳しい状況にはなるが、それでも両国は関係維持を図るために遣使の努力を続けている。

このような中国と半島情勢の変化の中で、かつての高句麗の遺民達によって中国東北部に渤海国が建設された。建国後まもなくは唐との関係は良好で、建国の英雄大祚榮は玄宗皇帝から「渤海郡王」に冊封される。このことによって以後「渤海国」或いは「渤海」と呼ばれるようになる。ところがこの冊封以降の渤海王たちは、徐々に唐からの独立を目指すようになった。当然、唐との関係は悪化して行く。この唐と渤海との対立に対し、今度は新羅が唐に協力する立場に立った。窮地に立たされた渤海は日本に近づいてくる。こうして初めての渤海使が七二七年に来日することになった。



渤海広場
第一代高王大祚榮レリーフ

大宰府は、外交、軍事が主要な任務であったことから、外交上の新羅使船、渤海使船、遣唐使船の入出国管理はもとより、多くの交易船の管理も大宰府が一元的に管轄していた。ところが交易が盛んとなり、異国品に対する需要が高まるにつれて、大宰府役人の特権は、彼らに濡れ手に粟の収入をもたらすようになる。このような役人の墮落が結果的に大宰府の行政機能を弱体化させてしまうことになった。各寺社、有力貴族達が勝手に交易船と取引するようになったからである。このため、船は荒津から那津の方へ入港するようになり、徐々に荒津時代の終焉を迎えることになる。これは緩やかな変化であり、その時期を特定することは難しいが、取りあえず十世紀前葉のこととしておこう。そうすると、この荒津時代は七世紀後葉から約二五〇年続いたことになる。

九世紀末の八九四年には遣唐使が廃止され、十世紀に入ると九二〇年に渤海使も終焉する。更に、九〇七年に唐が滅び、九二六年に渤海が滅び、九三五年には新羅も滅亡する。十世紀前葉は、大陸と半島で激動の時代が続き、これまでの国に替わる新しい国々が誕生した時代だったといえる。

次は「袖の湊時代」となるが、この時代はいきなり始まったわけではないので、そこへ至る時代背景の説明が必要である。

九〇七年、唐が滅亡し宋が興ると、日本の交易相手国は宋に変わる。この日宋交易を抑え、更に九州を掌握するようになるのが平清盛である。平氏の祖は桓武天皇とされているが、この桓武天皇を祖とする桓武平氏は、幾つもの系統に別れており清盛はこの内の伊勢平氏の出である。伊勢平氏は維衡に始まるがその系譜は次のように続いている。

維衡－正度－正衡－正盛－忠盛－清盛－重盛－維盛

平氏と同時期に源氏も台頭してくるが、彼らが武家集団として世に出てくるのは十世紀のことであり、アジアの十世紀は大きな時代の曲がり角になっていたことが分かる。

この維衡を祖とする伊勢平氏は、伊勢北部をその本拠地としたが、この伊勢平氏が歴史の表舞台に登場するのは正盛の時代になってからである。正盛は諸国の受領を歴任し、白河院の恩寵を得て北面の武士となる。その子忠盛も北面の武士となり、白河院の没後は鳥羽上皇の厚い信任も得る。肥前の神埼荘は平安時代に皇室の荘園となるが、鳥羽上皇の時代に平忠盛がこの荘のあずかりどころ預所に任ぜられた。その子清盛の代になると、更に大宰大貳も併せて任ぜられ、清盛は肥前と博多を掌握することになる。この清盛が人工の港である「袖の湊」を那津の東側に築き、日宋貿易の振興に努めたと伝えられている。

袖の湊の名称は長く博多の地に伝承されて来ているが、その所在地は未だ確認されていないようである。博多にとってこの「袖の湊」は記念碑的な構築物であったと見られるところから、荒津時代以降を「袖の湊時代」としたい。この時代の終焉は平家の滅亡のときとしておこう。袖の湊時代を平安時代における武家勢力が台頭した時代と考えると、その始まりは十世紀となり、その終わりは一一八五年となる。この間、約三百年間が袖の湊時代であり、次の鎌倉時代を生み出すための呻吟の時代だったことになる。

(つづく)

〔参考文献：白石一郎『博多歴史散歩』（創元社、一九七三）、筑紫豊「(福岡の)先史・古代・中世・近世」、『福岡の歴史』（福岡市、一九七九）、田村圓澄氏編『古代を考える 大宰府』（吉川弘文館 一九八七）、等〕

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783